

教育セミナー「若手医師のための勉強会」

前置き

小川 俊一，佐地 勉

日本小児循環器学会学術委員会

第41回日本小児循環器学会総会・学術集会の3日目に、2004年に引き続き、学術委員会主催による第2回目の教育セミナー「若手医師のための勉強会」を開催することができました。2005年度の学会会長である石澤瞭先生のご好意により、300席収容の広い会場をご用意いただき、多くの参加者を得て、盛会裏に終了することができました。この誌面をお借りしまして、関係各位に心より御礼申し上げる次第です。

2005年度は、まず小児循環器領域の日常診療をするうえで必要である分子遺伝学を取り上げ、上砂光裕先生に「小児循環器領域における分子遺伝学」と題して、講演していただきました。大変遠大なタイトルにもかかわらず、基本的なことから臨床におよぶ多岐にわたる内容を、短時間に、かつ分かりやすく解説してくださいました。今後、遺伝子診断の重要性はますます拡大することが予想され、この講演が遺伝子診断を進めるにあたっての道標となることが期待されます。

次に、2004年のファロー四徴症に引き続き、2005年度は、臨床の現場で比較的良好に経験する完全大血管転位症(TGA)を取り上げ、内科より総崎直樹先生に、また、外科より麻生俊英先生にご講演いただきました。

総崎先生は早期診断と適切な術前管理の重要性を強調されていました。特に、胎児期からTGAの診断が可能となってきたことにより、母体搬送による安全な児の娩出、さらに、出生後の速やかで的確な治療が行われるようになってきた現状をお話くださいました。また、TGAの内科管理は常に外科治療を前提に行われなくてはならず、可能な限り、患児にとって良い時期に、良い状態で外科医にバトンタッチすることが重要であると結んでいらっしゃいました。

次に、外科の立場から麻生先生がご講演くださいました。麻生先生は、動脈スイッチ術で一番重要なのは冠動脈移植であることを強調され、最近の国内外での冠動脈移植術式、およびその成績をお示しになりました。また、動脈スイッチ手術は、若手の外科医にとって優秀な小児心臓血管外科医になるために目標とすべき一つの到達点であることを強調されました。お二方のお話の中で、診断に用いる冠動脈のパターン分類に違いが認められました。総崎先生は、煩雑ではあるとしながらもShaher分類を推奨されましたが、麻生先生はPlancheの分類が簡便で、外科手技上の問題点をよく整理した分類であると話されました。今後、この問題は内科医と外科医との間で論議されなくてはならないと思われる。

さらに、麻生先生は若手小児循環器外科医師のトレーニングについても言及されました。トレーニングには数が必要であり、症例数が少なく技術の習得に時間のかかる動脈スイッチ手術のような困難な手術では、各施設で年間少数例を手術していても仕方がなく、むしろ症例を1カ所に集めて技術を短期間に修得させ、“learning curve”をより短くさせることが重要ではないかと訴えていらっしゃいました。今後、わが国において真剣に討議されなくてはならない極めて重要な問題の提起であると思われる。

約2時間にわたり3人の先生方にご講演をいただきました。ここにその内容をそれぞれの演者の方々におまとめいただきました。2004年の教育講演に引き続き講演集です。毎年の講演集をまとめていければ、up to dateな内容満載のサブテキストとなることと思います。

別刷請求先：〒113-8603 東京都文京区千駄木 1-1-5

日本医科大学付属病院小児科 小川 俊一